



東和毛織(株)

世界のウールと獣毛の糸を生産する



高級ウールやカシミアなどの人気復活気配で俄然注目されるのが、今回紹介する東和毛織。「毛織」という名称が付いている

が、10年前からウールや獣毛の梳毛糸や意匠系、リリヤーンの生産に切り変えた。

用途は尾州産地の機屋向け、全国のニット、アパレル、OEM(相手先ブランドによる生産)の手編み糸がそれぞれ3分の1(生産高ベース)となっているが、同社の特徴は何とんでも徹底した小ロット体制にある。「ロットが大きいに越したことはない」(渡辺社長)がミニマム200^{キログラム}以下でも受注する。

もう一つの特徴は梳毛でありながら、細さは72番手まで紡績できるのは当然として、太さが「どこまでも可能」という点。「信じられない」という声が聞こえそうだが、実はそれを可能にする英式紡績機を保有しているのだ。

早速商品を紹介しよう。

まず、ウールから。原産地はオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アルゼンチン、フォークランド、チリ、ウルグアイ、ペルー、アメリカ、英国の10か国。あたかも世界のウール博物館である。

主な原料は「オーストラリアメリノ」は当然としてメリノとリンコルン種の交配種で光沢とソフト感のある「ポロワース」(オーストラリア) 山岳地帯で飼育され、白度が高く、羊毛独自の縮みであるクリンプが大きくて弾

力性に富む「ニュージーランドメリノ」、アルゼンチンで飼育されている白くて手触りの良い「チューブットメリノ」、チリ南部の白度と柔軟で弾力性に富むメリノ種「プンタウール」、アメリカで飼育されている初期欧州メリノの草分け「ランブイエメリノ」など、その数は19種にも及ぶから壮観だ。

ウールは産地の気候、地質など環境によって微妙な品質感が異なり、光沢、繊維の細さ、柔軟性、弾力性が違う。「この差を大切にしたいから、多くコレクションした」と渡辺社長は情熱を持って語る。

次に獣毛のコレクションを紹介しよう。モヘア、カシミア、アルパカ、キャメル、アンゴラなどで、複合化ニーズに対応してシルクや麻とのブレンド糸も生産している。これらに中でモヘアとアルパカには定評のある同社だが、注目されるのがカシミアの梳毛紡。過去繊維の長さが45^{センチメートル}以上なければ、紡毛となったが、同社は独自技術で35^{センチメートル}も可能にしている。



2月にFDCで開かれたJY(ジャパン・ヤーン・フェア)に出展し、多くのリクエストをとった同社だが、受注は「お陰さまで順調」という。ウール、獣毛「専門店」の力発揮の舞台は揃った。